

浦入遺跡の縄文丸木舟



丸木舟が出土した浦入遺跡

平成9年、舞鶴市の北端にある大浦半島の西端で、舞鶴湾口の東岸にあたる浦入^{うらにゅう}遺跡で、縄文時代前期後半（今からおよそ5,000年前）の丸木舟^{まるきぶね}が見つかりました。この丸木舟は直径1 m以上、長さ8 m前後

の杉の巨木を半分に割り、石の斧を使って割り貫いて作ったものでした。

縄文時代には全国で80例程度の丸木舟が見つっていますが、舳先が細く、船本体部分が半円形に近いものと、船体が半円形ではなく、舳先のがっしりとしたものがあります。前者は、前からの波には弱い半面、小回りがきき、河川に適したものの、後者は外洋航海用と考えられています。

京都府内では縄文時代の丸木舟の出土例としては、向日市森本町にある森本遺跡^{もりもと}と浦



海拔0 mの海岸で丸木舟を発見

入遺跡のものがあります。

森本遺跡の丸木舟は完全な形では残っており、長さは3.7 m、幅50cmでした。その形態や出土場所から河川に適したものと考えられます。丸木舟周辺からは縄文時代晩期の土器が出土しています。



浦入湾に広がる浦入遺跡

一方、浦入遺跡の丸木舟は、残っていた長さが5 m、最大幅1 mで、丸木舟としては幅広のものでした。舟先端部の上端の板の厚さが9 cm 前後、船底の板の厚さが7 cm でした。船体の長さは8 m 前後と推定でき、その特徴から外洋航海用のものと考えられます。浦入遺跡は外洋に面した岬の内側で、船着場のような場所にあり、この舟を利用して縄文人は外海へ漕ぎだしたものと思われます。

丸木舟が出土した地点には、丸木舟が作られた時期よりもやや新しい時期のものですが、^{さんばし}棧橋に伴うと思われる杭や、舟を停泊させる^{いかり}碇と思われる平石が見つかっています。

この浦入遺跡の調査では、北陸地方の特徴をもつ縄文土器のほか、富山県産とみられる蛇紋岩製の大型耳飾りやコハク製の玉類、少量ですが島根県隠岐産の^{こくようせき}黒曜石などが出土しており、山陰地方や北陸地方へこの舟を利用して航海したと推定されます。

縄文時代、縄文人は狩猟を主体として、植物を採取して生活していたというイメージがありますが、ヒスイやコハク・黒曜石などの原石や製品を求めて、陸路や海路で広範囲にわたって交流をしていたことを浦入遺跡は教えてくれます。 (石井清司)